開会ご挨拶

同志社大学人文科学研究所長　小　山　　隆

本日は人文科学研究所75周年記念シンポジウムにお運びいただきましてありがとうございます。日頃から人文研の活動をご支援いいただいています、みなさま方に来ていただき、うれしく思います。75年の歴史の、ごく最初の頃のことを勉強してみました。最初から貫かれているものがあるなと、それを確認させていただいた上で、今後もがんばりますという意思表明をしてご挨拶に代えさせていただきます。

歴史年表をごらんいただきますと、現在の「人文科学研究所」という名称になりましたのは1957年ですが、その前身は1944年、戦争末期に「同志社大学研究所」としてできました。その時の資料では「教育に関する戦時非常措置方策」が閣議決定され、それを受けて同志社大学研究所が設置されました。非常措置方策は戦争末期、文系私立大学について相当数を専門学校に転換する、専門学校については入学定員を2分の1にするなど、私立文系を抑える方針が出た時、何とか生き残るありようの一つとして「同志社大学研究所」ができたようです。1944年9月、研究部門の設置、第1部が「哲学・宗教・芸術」、別の資料では「言語」も入っています。第2部が「行政、法律、経済、厚生」とあります。同志社大学は6学部の時代が長く続き、文系は神学部、文学部、法学部、経済学部、商学部の5学部でした。その内第1部門が神学部、文学部にかかわるところ、第2部が法学部、経済学部、商学

部にかかわるところと、あらっぽくはいえるでしょうか。人文科学、社会科学を網羅的に対象としている。そしてさらに網羅的だけでない面白さも感じました。初代所長が就任挨拶で「我が同志社大学研究所は拡大せられるなら当然に総合研究所とせられるべきであり、決して特殊研究所とせらるるべきではありません」とあります。「単独研究ではなく、共同研究を大事にしていくべきだ」と書かれています。今、我々が大事にしようとしたものが、戦時下にも芽があったことを再確認しました。

その後、終戦、戦後となります。1940年代後半は試行錯誤の時代だったようです。1950年代、大学が充実し始める時期に研究所も飛躍していきました。一つは特別予算をとって資料収集部門をつくることを1952年に始めています。今につながる人文研の大きな特徴の一つだと思います。共同研究は設立の時からあることはありましたが、1952年、「個人研究に助成金を出すのは来年からやめたい。総合的な研究、研究所として大きなテーマを出し、そのテーマに研究者を集める。テーマは各分野に渡るテーマが理想的である」との方針が資料にあります。複数の人による共同研究というよりは、「複数の分野に跨がる人たちの総合的研究」をしていこうと1952年の段階で志向されている。後ほど、人文科学研究所の将来計画のお話をさせて頂きますので、その時にもお時間をちょうだいしますが、1940、1950年代に定められた骨格が現在にもつながっている、それを守っていくことがなされているかと思い、自信をもったということです。

それ以降の長い歴史の間に、さまざまな研究叢書や学術誌が出

されています。資料集を用意しましたので、ごらんいただければと思います。3つの分野、「キリスト教社会問題研究」「京都を始めとする近現代日本の地域研究」、そして「現代社会研究」という3つのカテゴリーで今後重点的に研究を進めたいと思っていますが、本日は、この3分野の先生方にお話をお願いし、コメンテーターからコメントをいただきたいと思っています。人文科学研究所の現在の到達点が現れるものかと思っていますので、ごいっしょに時間を過ごさせていただきたいと思います。どうかよろしくお願いします。